

ASHUREY CLASS

2024

受難週の瞑想

No.4 2024. 3.27

「受難週の瞑想」をする上で大切な視点

【新改訳2017】 マタイの福音書4章17節
この時からイエスは宣教を開始し、
「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから」と言われた。

- イエシュアの公生涯での一切の言動は、徹頭徹尾「御国の福音」です。イエシュアの語ったことばとなされた奇蹟は、すべて御国のデモンストラーションです。「御国」(マルフォト)はメシアが統治する国であり、その到来には、「すでに」と「いまだ」の緊張関係にあります。
- イエシュアの口から出る一つひとつのことばは「霊であり、いのち」です。しかも、それは預言的であり、奥義的であり、重層的なのです。

「受難週の瞑想」をする上で大切な視点

【新改訳2017】ヘブル人の手紙4章12節
神のことは生きていて、力があり、両刃の剣よりも鋭く、
たましいと霊、関節と骨髄を分けるまでに刺し貫き、
心の思いやはかりごとを見分けることができます。

- イエシュアの受難は「神とサタン」「霊と肉」との壮絶な戦いです。
「受難週の瞑想」を通して、私たちの内にある肉の本質を知ると同時に、
霊によって生きることに「目覚める」(「ウール」וּלְ)ことです。

1. 今回の瞑想の主題

● 前回は、イエシュアが「いちじくの木を枯らした」という出来事、あるいは「山に向かって、『立ち上がって、海に入れ』と言えばそのとおりになる」ということ、これらはエルサレム神殿が崩壊して、ユダヤ人たちが諸国民の中に離散することを預言したものでした。なぜそのようなことになるのか。その理由についてまとめられているのがマタイ21章23節～23章です。そこには、イエシュアと対峙する祭司長たち、民の長老たち、パリサイ人たち、サドカイ人、律法学者たち、と言った当時の利権階級にあった宗教的指導者たちの真の姿が厳しく糾弾されています。このことを知ることで、肉の本質が見えてきます。

● 「受難週も瞑想」の四回目は、そうした糾弾の「総括のことば」を見た後で、私たちの中にある「肉」(=ストイケイア)にしっかりと目を留めながら、そこから解放しようとしてくださるイエシュアの「イエシュアの受難の24」(Twenty Four)の瞑想の備えとしたいと思います。

2. 「祝福あれ、主の御名によって来られる方に」 ①

【新改訳2017】 マタイの福音書23章36～39節

36 まことに、おまえたちに言う。

これらの報いはすべて、この時代の上に降りかかる。

37 エルサレム、エルサレム。

預言者たちを殺し、自分に遣わされた人たちを石で打つ者よ。

わたしは何度、めんどりがひなを翼の下に集めるように、

おまえの子らを集めようとしたことか。

それなのに、おまえたちはそれを望まなかった。

38 見よ。おまえたちの家は、荒れ果てたまま見捨てられる。

39 わたしはおまえたちに言う。今から後、

『祝福あれ、主の御名によって来られる方に』とおまえたちが言う時が来るまで、決しておまえたちがわたしを見ることはない。』

2. 「祝福あれ、主の御名によって来られる方に」 ②

●イエシュアが過越の祭りのためにエルサレム入りした折、「宮きよめ」と「いちじくの木を枯らす」という奇蹟を行いました。それはイスラエルを代表するユダヤの宗教指導者たちを放棄し、彼らが最も神聖視している神殿を打ち壊して新しく建て直すという預言的行為でした。イスラエルの民とエルサレムの神殿は、本来神のご計画を実現するために神によって選ばれ、建てられたものでした。ですからイエシュアは、「わたしは何度、めんどりがひなを翼の下に集めるように、おまえの子らを集めようとしたことか。それなのに、おまえたちはそれを望まなかった」と言っているのです。

●「めんどりのひな」とは「めんどり」が神で、「ひな」はイスラエルの民のことです。以下の申命記では、「鷺」と「巢のひな」にたとえられています。

①【新改訳2017】申命記32章11～12節

11 鷺が巢のひなを呼び覚まし、そのひなの上を舞い、翼を広げてこれを取り、羽に乗せて行くように。

12 ただ【主】だけでこれを導き、主とともに異国の神はいなかった。

2. 「祝福あれ、主の御名によって来られる方に」 ③

②【新改訳2017】イザヤ書 31章4～5節

4 まことに、主は私にこう言われる。「獅子、あるいは若獅子が獲物に向かって吼えるとき、たとえ大勢の牧者がそこに呼び集められても、獅子は彼らの声にひるむことなく、彼らの騒ぎにも動じない。そのように、万軍の主は下って来て、シオンの山とその丘の上で戦う。

5 万軍の主は、舞い飛ぶ鳥のようにエルサレムを守る。

これを守って救い出し、これを助けて解放する。

●4節の「獅子、若獅子」とはアッシリア、「獲物」とはユダ、「大勢の牧者」とはエジプトをはじめとする周辺諸国のことです。「丘」はエルサレムを指します。

4～5節は、主がどのような方法でエルサレムのために戦って、その民を守られるかについて述べています。「獅子」と「若獅子」にたとえられるアッシリアが「獲物」であるユダの民に向かって吼えるとき、しかも周辺諸国の「牧者」がみなエルサレムに集められたとしても、万軍の主が天から下って来て戦われるという預言です。この預言は「終わりの日」において、再臨のキリストがオリーブ山に立ち、反キリストの軍勢を滅ぼしてエルサレムを守り、未曾有の危機から神の民を救い出し、解放することを預言しています。

2. 「祝福あれ、主の御名によって来られる方に」④

●聖書の中で実際に起こったことは、終わりの日に起こる出来事の予表です。旧約ですでに実現したことは、すでに終わったこととして理解するのではなく、最後に起こる出来事とも深くかかわっているということを想起しなければなりません。「わたしは何度、めんどりがひなを翼の下に集めるように、おまえの子らを集めようとしたことか」と語るイエシュアは、自分が神であることをここで証しているのです。

●イスラエルの民が、本来の祭司としての使命を再び果たすことができるために、一度は、「おまえたちの家は、荒れ果てたまま見捨てられる」のです。「おまえたちの家」の「家」は単数であることから、神殿のことを指していますが、「主の家」ではなく、「おまえたちの家」となってしまうのです。それゆえその神殿(宮)は「見捨てられる」(ψύψυ)のです。その意味は「そのままにしておく、放棄する」という意味です。しかし「『祝福あれ、主の御名によって来られる方に』とおまえたちが言う時」が来たときに、キリストは地上再臨されるのです。

2. 「祝福あれ、主の御名によって来られる方に」 ⑤

●この祈りは、異邦人の私たちが祈る祈りではありません。ユダヤ人たち(=イスラエルの残りの者)が心を痛めながら、「バールーフ・ハツバー・ベシエーム・アドナイ」と祈るとき、主は地上に再臨されるのです。

アドナイ	ベシエーム	ハツバー	バールーフ
יהוה	בְּשֵׁם	הַצֵּבָא	בְּרִוּךְ
主の	御名によって	来られる方に	祝福があるように

●この祈りなくして、キリストの再臨が実現されることは決してありません。この祈りがなされるために、イスラエルの残りの者は獣と呼ばれる反キリストによる未曾有の苦難を通らなければならないのです。この歌がイスラエルの残りの者によって祈られるのは奇蹟の中の奇蹟、復活の中の復活に等しいのです。ちなみに、私たち教会が歌うのは、天使たちが歌った「天軍賛歌」(ルカ2:14)です。
「いと高き所で、栄光が神にあるように。
地の上で、平和がみこころにかなう人々にあるように。」

2. 『祝福あれ、主の御名によって来られる方に』 ⑥

●ダニエル書の預言に「七十週の預言」があります。その預言によれば、六十九週までの預言はすでに実現しています。残るはあと一週の七年間です。その一週が始まるのはエルサレムに神殿が建つ時です。今は歴史が止まっている状態です。なぜなら、聖書の歴史は、イスラエルの民と神殿がエルサレムにおいて同時に存在しているときにしか進まないからです。しかし歴史が動き出したなら、七年間の後にメシア王国がこの地上に実現するのです。七年間は前半の三年半と後半の三年半とに分かれます。後半の三年半に獣と呼ばれる反キリストが立ち上がって、神の民であるイスラエルを滅ぼそうとします。しかし神は彼らを荒野(ペトラ)に隠し、蛇である反キリストの難から守ります。そして彼らに「恵みと哀願の霊」が注がれ、イエシュアがメシアであることに目を開かせるのです。と同時に、彼らが「バールーフ・ハツバー・ベシエーム・アドナイ」と祈ることで、メシアが地上再臨されるのです。そこで、彼らとすでに携拳された教会と大勢の異邦人は、王なる祭司としてメシアに仕えるようになるのです。

3. 「神のご計画における地的現実」 ①

【新改訳2017】 マタイの福音書26章1～5節

- 1 イエスはこれらのことばをすべて語り終えると、弟子たちに言われた。
- 2 「あなたがたも知っているとおおり、二日たつと過越の祭りになります。そして、人の子は十字架につけられるために引き渡されます。」
- 3 そのころ、祭司長たちや民の長老たちはカヤパという大祭司の邸宅に集まり、
- 4 イエスをだまして捕らえ、殺そうと相談した。
- 5 彼らは、「祭りの間はやめておこう。民の間に騒ぎが起こるといけない」と話していた。

●ここには、イエシュアによる最後(四回目)の受難(=引き渡す)の予告があります。神の啓示について「天的現実」と「地的現実」の二つの面があります。

「天的現実」とは「昔から定められている神のご計画」

「地的現実」とは「天的現実を可能とさせてしまう人間のあらゆる計らい」があります。その双方を考える必要があります。

3. 「神のご計画における地的現実」 ②

●何よりも大切なことは、イエシュアの十字架の死は決して偶然ではなく、神のご計画の目的を実現させる必然の出来事だということです。イエシュアの発言と行動はすべて神のご計画に基づいてなされているのです。しかし弟子たちにはそのことが見えていませんでした。

●以下は、神のご計画を実現させてしまう地的現実が記されています。

【新改訳2017】マタイの福音書26章3～5節

3 そのころ、祭司長たちや民の長老たちはカヤパという大祭司の邸宅に集まり、

4 イエスをだまして捕らえ、殺そうと相談した。

5 彼らは、「祭りの間はやめておこう。民の間に騒ぎが起こるといけない」と話していた。

●イエシュアの受難の予告の裏で、イエシュアに対する陰謀が進められていきます。「祭司長たちや長老たち」、すなわちユダヤの指導者たちは、カヤパという大祭司の邸宅に集まって、イエシュアをだまして捕らえ、殺そうと相談したのです。結論はすでに決定していますが、いかにしてイエシュアを殺すかが論議的でした。

3. 「神のご計画における地的現実」 ③

●なぜ彼らはイエシュアを殺そうとするのでしょうか。なぜイエシュアを恐れているのでしょうか。それは民衆がイエシュアをメシアとして認めていたからです。もしイエシュアが民衆を自分の側に引きつけて反逆的な動きを起こされるなら、自分たちが今の地位から追われるという身の危険を感じたからです。自分たちの身の保全のために、イエシュアを殺さなければと考えたのです。この「恐れ」の思いこそ、サタンに支配されている動かぬ証拠です。

●そもそも人が蛇の言うことを信じたことで、生じた感情が「恐れ」です(創3:10)。その恐れに支配されている宗教指導者たちを、イエシュアは「蛇ども、まむしの子孫ども」と断罪します。イエシュアによって彼らの正体がますます明らかにされます。その正体はパウロのいう「肉の思いは死です。肉の思いは神に敵対する」ことです。このことを知ることのない受難週は考えられません。受難週の大切な瞑想のテーマだからです。このこととイエシュアが弟子たちだけに語る話も重要です。ヨハネ14～16章には、私たちが霊の中に神が住まわれることが語られているからです。その前にストイケイアの本質を知る必要があります。

4. 「ストイケイア」の本質 ①

● 「ストイケイア」(στοιχεῖα)という語彙は新約聖書に7回使われています。パウロが5回、ペテロは2回です。ここでは使徒パウロが書いたものだけを取り上げてみたいと思います。なぜなら、パウロこそ、人一倍、この「ストイケイア」に熱心な者であったからです。順にそれを挙げてみます。

① ガラテヤ人への手紙4章3節

同じように私たちも、子どもであったときには、**この世のもろもろの霊**の下に奴隷となっていました。

② ガラテヤ人への手紙4章9節

しかし、今では神を知っているのに、いや、むしろ神に知られているのに、どうして弱くて貧弱な、**もろもろの霊**に逆戻りして、もう一度改めて奴隷になりたいと願うのですか。

③ コロサイ人への手紙2章8節

あの空しいだましごとの哲学によって、だれかの捕らわれの身にならないように、注意しなさい。それは人間の言い伝えによるもの、**この世のもろもろの霊**によるものであり、キリストによるものではありません。

4. 「ストイケイア」の本質 ②

④コロサイ人への手紙2章20節

もしあなたがたがキリストとともに死んで、**この世のもろもろの霊**から離れたのなら、どうして、まだこの世に生きているかのように、

⑤へブル人への手紙5章12節

あなたがたは、年数からすれば教師になっていなければならないにもかかわらず、神が告げたことばの**初歩**を、もう一度だれかに教えてもらう必要があります。あなたがたは固い食物ではなく、乳が必要になっています。

●パウロのいう「ストイケイア」とは何でしょうか。それは「**もろもろの霊**」「神のことばの**初歩の教え**」を意味します。これらは「幼稚な教え」「役立たずの宗教」「人の言い伝え」(信条・伝承・伝統・習慣など)と言い換えられます。これらはいわば**宗教の霊**です。ユダヤ教のおきてや儀式、さまざまな規則を守ることによって救われるというような考えや教え、人の言い伝えのために神のことばを無にし、人間の命令を教えとして教えることは、すべてこの世の「もろもろの霊」(悪霊)から来るもので、それによって人は奴隷にされてしまうのです。それが当時の宗教指導者である律法学者、パリサイ人たちがもたらしたものです。

4. 「ストイケイア」の本質 ③

●律法学者やパリサイ人たちは自分自身が奴隷となっただけでなく、彼らの教えによって人々をも奴隷にしたのです。彼らの教えは人々を救いに導くどころか、逆に大きな重荷を与えて、疲れさせるものだったのです。ですからイエシュアはこう語りました。

【新改訳2017】マタイの福音書11章28～30節

28 すべて疲れた人、重荷を負っている人はわたしのもとに来なさい。

わたしがあなたがたを休ませてあげます。

29 わたしは心が柔和でへりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすれば、たましいに安らぎを得ます。

30 わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからです。

●先祖の伝承に人一倍熱心だったパウロは、これこそ正しい教えだと信じて教会を迫害していたのです。しかし彼は、知らないでしたことだったので、神からのあわれみを受けたと述べています(ガラ1:13, Iテモテ1:13)。このパウロの「知らないでしたことだったので、あわれみを受けました」ということばに、感動を覚えます。

5. 「ストイケイア」の特徴 ①

● 「ストイケイア」が「この世のもろもろの霊」であることから、彼らが用いる常套手段は「**恐れ**」です。そのために、権威や人からの評価を重んじ、うわべを気にします。イエシュアは当時の宗教指導者たちの父を「悪魔」であると言い、その父の欲望を成し遂げたいと言っていると言っています。これは、最初のアダムにつながる者がすべてがそうなのです。その捕らわれから私たちが自由とされるために、イエシュア「死と復活」が定められているのです。それは「いのちを与える霊」となって人の霊を再生し、キリストにある新しいNew Creatureとするためなのです。

● ここでは、「ストイケイア」に囚われている特徴を一つだけ取り上げます。それは、だれから、何のために与えられた権威なのかということです。

5. 「ストイケイア」の特徴 ②

【新改訳2017】 マタイの福音書21章23～27節

- 23 それからイエスが宮に入って教えておられると、祭司長たちや民の長老たちがイエスのもとに来て言った。「何の権威によって、これらのことをしているのですか。だれがあなたにその権威を授けたのですか。」
- 24 イエスは彼らに答えられた。「わたしも一言尋ねましょう。それにあなたがたが答えるなら、わたしも、何の権威によってこれらのことをしているのか言いましょう。」
- 25 ヨハネのバプテスマは、どこから来たものですか。天からですか、それとも人からですか。」すると彼らは論じ合った。
- 「もし天からと言え、それならなぜヨハネを信じなかったのかと言うだろう。
- 26 だが、もし人から出たと言え、群衆が怖い。彼らはみなヨハネを預言者と思っているのだから。」
- 27 そこで彼らはイエスに「分かりません」と答えた。イエスもまた彼らにこう言われた。「わたしも、何の権威によってこれらのことをするのか、あなたがたに言いません。」

●ここに権威についての問答の問答があります。

5. 「ストイケイア」の特徴 ③

●祭司長たちや長老たちがイエシュアに対して、「何の権威によって、これらのことをしているのですか。だれがあなたにその権威を授けたのですか」と聞いて来ました。この詰問には、宮の中でのイエシュアの大胆な振舞を決して許すことはできないという意図があります。「だれが」という言葉の裏には、神殿の管理をゆだねられている自分たち以外に、だれもこのような権威を与えることなどできないはずだという自負と怒りが込められていたのです。このことは、使徒たちに対しても同じでした(使徒4:7)。

●祭司長たちや長老たちの言いがかりに対して答える代わりに、イエシュアは逆に彼らに質問をしています。その質問とは「ヨハネのバプテスマは、どこから来たものですか。天からですか、それとも人からですか」というものでした。このイエシュアの質問は、ヨハネの権威と自分の権威が本質的に同じものであることを意図しています。つまり、ヨハネの権威を受け入れる者は、イエシュアが神から遣わされたことを受け入れなければならないという論理です。なぜなら、ヨハネが「私はあなたがたに、悔い改めのバプテスマを水で授けていますが、私の後に来られる方は私よりも力のある方です。」(マタイ3:11)と証ししていたからです。「**天から与えられた権威なのか、それとも人からの権威なのか**」です。

今回の瞑想のまとめ ①

● 権威とは、神のご計画とみこころが実現するために神から与えられる(賦与される)ものです。ですから、神から与えられた権威がなければ、神の働きはできないのです。権威の問題はとても重要です。イエシュアは権威の根拠について、その公生涯において明確に答えています。ヨハネの福音書によれば、権威は「上から与えられる」必要があります。ローマ総督ピラトは、イエシュアの無罪を晴らそうとして、自分の無罪を弁明するようにイエシュアを促して、以下のように語っています。

【新改訳2017】ヨハネの福音書 19章10~11節

10・・・「私に話さないのか。私にはあなたを釈放する権威があり、十字架につける権威もあることを、知らないのか。」

11イエスは答えられた。

「上から与えられていなければ、あなたにはわたしに対して何の権威もありません。」

● 権威には「上から与えられる権威」と「下から与えられる権威」があるのです。イエシュアの権威は神から与えられたものですが、ユダヤ教指導者たちの権威は下から与えられたものです。それゆえ彼らは神ではなく、群衆(人々)を恐れるのです。

「上から与えられる権威」は、キリストから受ける「注ぎの油」によるのです。

今回の瞑想のまとめ ②

キリストから受ける「注ぎの油」

① 【新改訳2017】 Iヨハネの手紙 2章20節

あなたがたには**聖なる方からの注ぎの油**があるので、みな真理を知っています。

② 【新改訳2017】 Iヨハネの手紙 2章27節

しかし、あなたがたのうちには、**御子から受けた注ぎの油**がとどまっているので、だれかに教えてもらう必要はありません。その注ぎの油が、すべてについてあなたがたに教えてくれます。それは真理であって偽りではありませんから、あなたがたは教えられたとおり、御子のうちにとどまりなさい。

● 「聖なる注ぎの油」は、以下の出来事の写しと影です。

(1) 息を吹きかけて、いのちを与える霊を与えた(復活後) / プレーロー

(2) 権威としての聖霊を与えた(五旬節の時) / ピンプレーミ